

## 放流アワビの漁獲向上をめざして

— 深場資源の有効利用 —

田老町漁協青年部

吉 田 勉

### 1 地域及び漁業の概要

田老町は、人口 5,263人、世帯数1,516戸で、このうち、漁家数は702戸と47.5%を占めている。当漁協は組合員数702名で正組合員数576名である。

当漁協の平成6年度における年間水揚げは、約3,750トン、14億1,367万円である。内訳をみると、サケ漁業が4億9,006万円と全体の34.7%を占め、次いでコンブ・ワカメ養殖業の4億1,887万円（29.6%）、アワビ漁業の2億6,021万円（18.4%）となっている。

発表課題のアワビについては、昭和30年代の水揚げが年平均約79トン、2,684万円と金額では総水揚げの34%を占め、地域の基幹的漁業種目であった。

### 2 グループの組織及び運営

当青年部は、昭和62年3月に発足し、部員数は32名である。執行部は、部長1名、副部長2名、監事2名で構成している。

漁協が行う各種増養殖事業や試験研究などへの協力及び県等が実施する研修会、先進地視察などに積極的に参加し、青年部員の親睦や資質の向上を図っている。

これらの活動費は、会費、漁協等からの助成金で賄っている。

### 3 活動課題選定の動機

当漁協では、地域の重要種目となっているアワビ資源の増大を図るため表1に示すように従来からアワビ種苗生産、漁場造成を行い、毎年種苗放流を実施してきた。その漁獲量は図2に示すように、昭和38年度には123トンを示し、58年度まではほぼ50トンであった。しかし、その後減少して平成6年度は23トンである。

このような減少傾向は北部太平洋岸に共通した現象であることが試験研究機関及び普及員から報告されている。

当漁協においては現在の種苗放流数では、大きな漁獲量の期待は望めないとの意見が多く、平成5年度に国の補助事業により、種苗生産施設を整備した。また、平成8年度以降は殻長30mm以上のアワビ種苗を年間120万個生産し、放流することとしているが、現在の再捕率ではアワビ放流事業としての投資効果は十分といえない。このため、漁協では漁獲率を高める手法を検討した。

ここで参考にしたのが、先の試験研究機関等からの報告になるが、アワビは漁場の浅い所から深い所への移動は多いが、深い所から浅い所への移動が少ないとの指導を受けている。その結果、種々の方法が提案されたが、当面はカギ獲りで漁獲できない水深10~20mの深場における未利用のアワビ資源を漁協職員、青年部が調査し、潜水採捕の評価を行うこととした。

### 4 実践活動状況及び成果

#### (1) 調査方法

ア 平成6年10月12日~10月17日に田老6地区で青年部員等8名がスキューバ潜水でアワビ生息量等の調査を実施した。

イ 水深10~20mの海域(22.3ha)を対象に93点を枠取り(2m×2m)

調査し、生物の密度等を把握した。今回は、このうちアワビについてのみ発表する。

## (2) 結果

- ア 水深10～20mにおける殻長9 cm以上（岩手県漁業調整規則に基づく殻長制限以上）のアワビの生息密度は1 m<sup>2</sup>当たり120gであった。この重量は9 cmのアワビ約1個に相当する。
- イ 水深10～20mにおける殻長9 cm以上の放流貝の混獲率は34.8%であった。当漁協の漁期の混獲率は全漁場平均で33%である。
- ウ 今回採捕されたアワビの全個体数は491個で、このうち殻長9 cm以上は50.9%を占めていた。また、最大殻長は14.4 cm、重量443gであった。

## 5 波及効果

- (1) 今回調査した水深10～20mには、従来のカギ獲りの漁法では漁獲できない、いわゆる未利用資源が存在することが確認されたことから、青年部としては、この資源の有効活用についての提案をした。
- (2) これを受けて漁協では、種々検討の結果、あわび漁期においてこの未利用資源の活用を図ることとして潜水による採捕を行っている。
- (3) この採捕したアワビ水揚金は、採捕経費と増殖繁殖費として25%を除いた後、組合員に配分されている。
- (4) 従来のアワビ水揚金からは、手数料として5%が除かれるが、この未利用漁場からのアワビ水揚金からは特別に25%が差し引かれることになるが、組合員には不満を示す者もなく、今後のアワビ資源の増大や資源管理について、組合員個々においても意識の高揚が図られてきている。

## 6 今後の計画と問題点

当地区では若者の減少と高齢化の進行に加え、輸入水産物の増加による魚価安等の影響により、漁家経営は一層厳しい時代となっている。

漁業後継者の定着は我々青年部の責務でもあり、それには、漁協の主要事業であるアワビ漁の生産性を高める方法を開発しなければならないと考えている。

そのため、次の事項について取り組むこととしている。

- (1) 漁協青年部を一層強化して、他地区との交流を促進しながら、漁具・漁法の研究、導入に積極的に取り組んでいく。
- (2) 潜水士の免許取得者を増やし、深場資源の利用と漁場管理が充分できるようにする。
- (3) 漁場を広く利用できることにより、アワビの成長を促すことができると考えられるので、その効果を実証するために今後もデータを蓄積する。

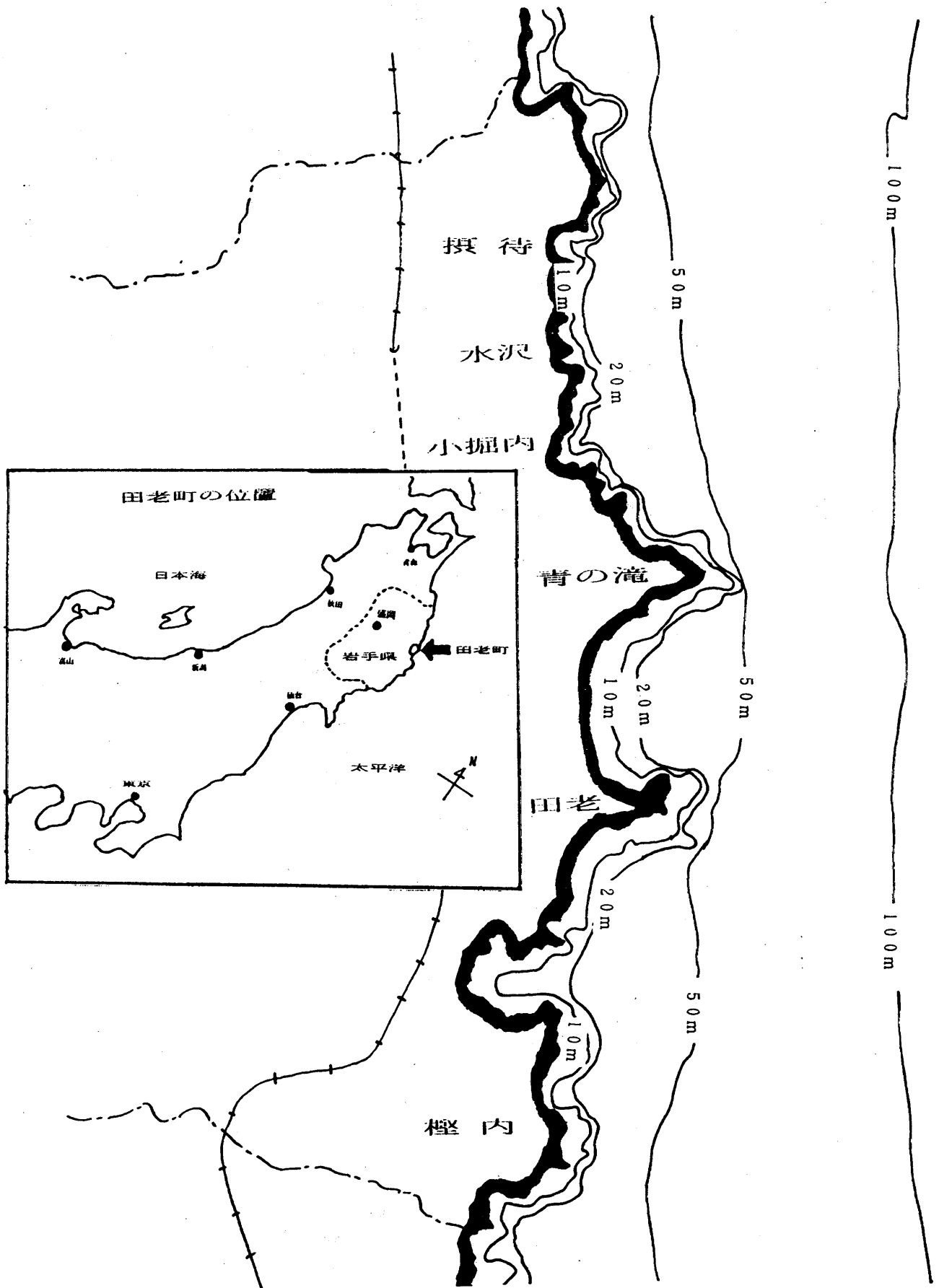


図 1 田老町漁協漁場図

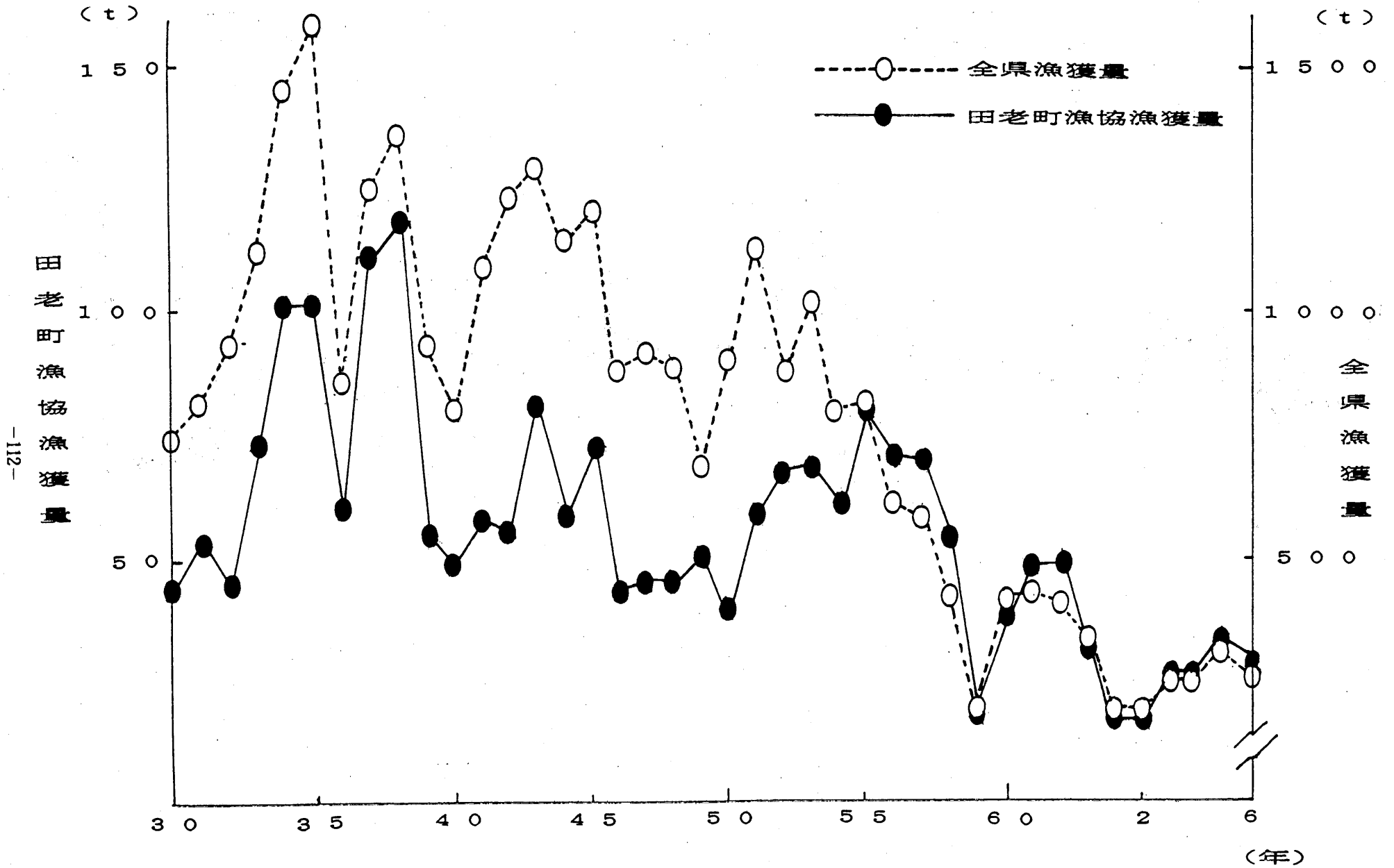


図 2 アワビ漁獲量の推移

表1

## アワビ漁獲量および放流数

年度	漁獲量(ト)	種苗放流数(千個)	備 考
50	40.5	-	
51	64.1	-	
52	70.5	-	
53	72.0	-	
54	62.0	-	
55	77.1	-	
56	67.5	30	
57	72.7	239	
58	54.1	604	異常冷水(59年2月)
59	20.7	406	
60	37.3	654	
61	48.2	648	
62	50.3	649	
63	31.8	667	
元	16.6	674	
2	17.2	706	
3	27.7	690	
4	23.3	663	
5	28.1	688	
6	23.0	742	種苗生産開始

表2 漁獲対象アワビの生息密度と資源の推定

項 目	調査地区					
	撰 待	水 沢	小堀内	青の滝	田 老	檜 内
(水深帯 ; 10.0~15.0m)						
調査地点数	5	9	7	9	7	13
調査対象面積 (ha)	1.25	2.25	1.75	2.25	1.75	3.25
生息密度 (g/m <sup>2</sup> )	68.5	92.6	72.9	435.0	30.3	71.2
推定資源量 (ト)	0.86	2.08	1.28	9.79	0.53	2.31
(水深帯 ; 15.1~20.0m)						
調査地点数	2	7	11	12	11	—
調査対象面積 (ha)	0.50	1.75	2.75	3.00	2.75	—
生息密度 (g/m <sup>2</sup> )	47.5	97.1	69.8	77.9	49.7	—
推定資源量 (ト)	0.24	1.70	1.92	2.34	1.37	—
(水深帯 ; 調査地域全体)						
調査地点数	7	16	18	21	18	—
調査対象面積 (ha)	1.75	4.00	4.50	5.25	4.50	—
生息密度 (g/m <sup>2</sup> )	62.5	94.6	63.6	230.9	42.1	—
推定資源量 (ト)	1.09	3.78	2.86	12.12	1.90	—